

伊曾保物語におけることわざ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23728

伊曾保物語におけることわざ

古保 勲

○『伊曾保物語』の教訓性について。

『伊曾保物語』の性格について野田寿雄氏は仮名草子を分類した中で、啓蒙教訓的なものの中に入れてゐる。

成立の事情について天草本の序「読誦の人へ対して書す」で「これ真に日本の言葉稽古の爲に便りとなるのみならず、善き道を人に教へ語る便りともなるべきものなり」

と記されているように、外人宣教師の日本語教科書として用いられるとともに、日本人に対しても興味ある噺話として倫理的教訓を与えるものとして選ばれたことがうかがわれる。

『伊曾保物語』は内容的にイソップ伝記と寓話に大別できる。

寓話（主として動物に仮託された人生訓）は表面の噺話の裏に教訓や諷刺がこめられており、特に金言の類は会話のなかで全体を生かすかためとなる重要性をもつて用いられているので、諺で口語りを要約する一面が『伊曾保物語』で十分活用されていることがうかがわれる。

○国字本（古活字版伊曾保物語）のことわざ

(A) 文末にあるもの

寓話のまとめとして「そのごとく」以下の文末にことわざが出て

おり、表面の話の裏に教訓や諷刺がこめられているもの。

(1) 才智は朽せぬ財

そのめくみによりでいそほもめてたくさかへる事限りなし才智は是くちせぬたからとそみえける（巻上十七いそほ諸国をめくる事）いそほが才智によつて財宝を恵み与えられる話のまとめ。

(2) 仇をば恩にて報ずる

あたをハ恩にてほうするなれハ悪人にはそのちからをおとさずる事かたかためにはよきたすけたるへし（巻中十五日輪とぬす人の事）盗人に妻を与えることが出てくるから、自分に害をなすものに子孫が繁昌すると困ることが出てくるから、自分に害をなすものに対しては却つて恩恵を施すものだとして妻を与えず元気を失わせるように仕向けた話に使われている。

あたはおんにてほうずる（毛吹草）

アタヲ恩ヲ報スル（諺苑）

天草本では「恩を仇をもつて報ずれば」鹿と葡萄の事 下心とあ

(3) 負楽

かるが故にことわざにはくひんらくとこそいひ侍き（巻中十八

京田舎のねずみの事)

田舎の鼠が京の有徳者の蔵でかろうじて命ばかりが助かったときの話の結びに出てくる。

天草本では「ただ貧樂には若かぬ。その子細は、貧を樂しむ者は外には樂しみは少いといへども、心中には萬の寶を持つによつて、心安う樂しむことは極り無い(鼠の事 下心)」と「その子細は」以下詳しく解説がつく。

邦訳日葡辞書(岩波書店)では

ヒンラク 貧乏ゆえの氣樂さ

(4) 高き堤も蟻の穴よりくづれ始むる

人の思ひのつもりぬれハついにはいつくにかのかるへきたかき堤もありのあなよりくづれハしむるとなんいひける(卷中十九狐とわしの事)

鶯が我子の餌食とするため、狐の子を奪い取ったがかえつて狐の怨みの情のために鶯の子が焼きおとされて狐の餌食になったという話で、小さな欠陥がもとでやがて大事が起るに至ることを喩える。

(5) 小難をしのばざればかへつて大謀を乱る

かるかゆへにことわざにいふせうなんをしのぐされはかへつてた
いほうをみたとともみえたり(卷中廿六とひと鳩の事)

鶯が鳩を餌食にするので、鳩が詮議評定して、鶯のもとに行つて助力を請い主君と仰ぎ奉らうとしたところ、鶯が鳩を一度に召し寄せて片端に捻じ殺した話による。

天草本では「萬事をせうと思はう時、先づよう未来の損徳を考へ、後の難の起りさうな事をばするな」(鶯と鳩の事 下心)と教えているところがこれに当る。

(6) 知る事をも知るとも、知らざる事をば知らずとせよ。

そのことく一さいの人間もしらぬ事をしりかほにふるまは、たちまちしよくをうけん事うたかひなししる事をしるともしらざる事をハしらすとせよゆるかせに思ふ事なかれ(卷中卅馬と獅子王の事)

獅子王が馬を武略でもつて取らえようとしたが逆に馬の巧んだ事によつて顔面を踏みつけられて氣を失つた話によつて。

不_レ知_レ為_レ不_レ知_レ是知也(醫喻_注尽)

天草版金句集では^{注10}

「知れらんをば、知れりとせよ、知らざらんをば、知らずとせよ、これ知れるなり。」

(7) 恩を知らぬは畜生にも劣る

其ことく人として恩をしらぬハちく生にもとる物也人にをんをなすときハてんたうこれをうけ玉ふなり(卷中卅一ししわうとはすとる事)

獅子王が足にとげを刺して難儀に及んだ時、はすとり(牧人)がこれを助けた。後にはすとりが獅子に食らわされる罪に及んだところ獅子王がこれを犯さず警固したという話のまともに用いる。

恩をみて思をしらぬは鬼畜のことし(毛吹草)

思ヲ受テ恩ヲシラヌハ鬼畜ノ如シ(諺苑)

(8) 六親不案なれば天道にも外れたり

そのことく人もしたしき中をすて、むやくの物とくミする事なこれ六親不案なれハ天道にもハつれたりとみえたり(卷中卅三鳥けたものとた、かひの事)

鳥とけだものが戦いに及んで、鳥が軍に負けようこれまでという時、こうもりがけだものに寝返りを打つたが、後に互いに和睦が成立した事によつて、翼を剥ぎ取られ、辛うじて日暮れにさし出るという寓話による。

(9) 鳩をにくみ豆作らぬ

人としても今までしたしき中をすて、したかふへきものにしたかはされ八天道にもそむきになあひにもハつれなんすかるか故にことわざに云鳩をにくみまめつくらぬとかや(巻中卅六腹と五たいの事) 五体が六根を始めとして腹を嫌んで、腹に従わなかつたとき、因惑してくたびれ極まつたという寓話による。

鳩こらすとて豆まかぬ(せわ焼草)

(10) 蟻螂が斧をもって陸軍に向かふ

きたなきもの、身としてさかしき人をたふらかさんとする事たうらうののをもつてりうじやにむかふかごとしうつけたるものハうつけてとおるか一けいそやかしこたてこそうとましけれ(巻下十一野牛と狼の事)

犬の皮を着て羊の警固に當つていた野牛が狼をあまりに深追いたためばれて食い殺された寓話による。

蟻螂が斧を取て籠車に向(毛吹草)

蟻螂が斧(せわ焼草)(諺苑)

蟻螂が斧を以つて陸軍に向ふが如し(譬喩尽)

日葡辞書では

蟻螂が斧を上げて陸軍に向ふが如し

(11) 鶉のまねをする鳥

そのごとく我身のほとをしらすして人の威勢をうらやむものハ鶉のまねをするからすたるへし(巻下十二鶉と鳥の事)

鶉のまねをして野牛をつかみ取ろうとした鳥が、野牛の毛が深くからまり主人につかまつて羽を切られた話から出たたとえ。

鶉のまねのからす(せわ焼草)

鶉ノマネスル鳥水ヲノム(諺苑)

(12) 腰抜けのゐばからひ

しからすハなんそすみやかに敵こくをほろぼさるこしぬけのゐはからた、み大鞍に手拍子ともこれらの事をや申侍へき(巻下十七ねすみのたんかうの事)

猫に手を焼いた鼠の談合で猫の首に鈴をつける段になつたが誰も付けることが出来ず議定が終らず退散した寓話による。

(13) 賢臣二君につかえす

しかのミならず二人のきけんをはからうハぐるしみつたねにふかき物なりかるかゆへにことわざに云ふりの君につかへかたしとや(巻下十八男二女をもつ事)

有男が老若二人の妻を持つていたが、二人の妻の要望を満たすために、一方で鬚鬚の黒を、一方で白を抜かれて毛がなくなつた寓話で二人を満足させるように処することの困難なことを教えている。

けんじんは二君につかえす(毛吹草)

賢臣二君につかへず(せわ焼草)

賢人二君ニ事ヘズ貞女両夫ニマミエズ(諺苑)

天草版金句集では

忠臣二君に仕へず 貞女両夫に更へず

心、よい臣下は二人の君には仕へず。正しい女は二人の夫にはま

みえぬものぢや。

(14) 血を含みて人に噴けば先づその口汚る

ひとにをしかけんと思ふハまつわか身のくるしみとみえたりちをふくみて人にはけハまつその口けかる(巻下廿一人をねたむハ身をねたむと云事)

欲心深き物と人を嫉む心深き者の二人が御門から望みを述べさせられ、互いに請い奉らなかつたとき一方の者が他方の者を苦しめよ

うと片目を抜くことを申し出て、かえつて自分が苦しい目にあつた
寓話にする。

天草本では「いかに狼よう聞け、人の上を訴ゆる者は、血を含んで人に嘔き掛くると同じ事ぢや、嘔き掛けうとするよりも、先づその口を汚すといふことが有る、忠言をこそえ言はずとも、せめて讒言を吐くな」(狼と狐の事)と会話の文中に組み入れている。

天草版金句集

血を含んで人に嘔けば、先づその口汚る

心、人に仇をなさぬ先に、先づわが身に仇をするものぢや

(15) 心軽き者はつねに静かなる事なし

心かろきものハつねにしつかなる事なしとみえたりかろくしく人のことを信じてみたりにうつる事なかれ(巻下卅人の心のさたまらぬ事)

翁が市に出て馬を売ろうと思ひ、親子一緒につれだつて出かけたとき、通行人の意見によつてあれこれと考え方ややり方が変わり苦労する寓話による。

(B) 文中に用いられている教訓性の強いことわざ

(1) 舌三寸のさえずり

夫世中のありさまを見るに舌三寸のさえずりをもつてけん世ハあんをんにして(巻上第五けたものしたの事)

三寸の舌のさえずりをもつて五尺の身をそんし候も(同)

三寸の舌のさえずりをもつて五尺のみをはたす(毛吹草)

三寸の舌を以て五尺の身を破損す(譬喩尽)

舌三寸ノサヘツリニ五尺ノ身ヲハタス(諺苑)

天草本では「それをなぜと申すに天下の善悪は舌三寸の嚼るにあ

るといふことがござる」(イソボが生涯の物語略)と使われている。

(2) 事の後に千万悔いんよりはしかじ

ことの後に千万悔いんよりはしかじ

よ(巻中第一いそほ子息にいけんの事)

このののちにちたひくみんよりハことのさきに一たひも案せんに

はしかしとこそみえける(巻中廿六とひ鳩の事)

(3) 公の私

いそ保ちうすへきよし仰付られ候時あまりにおしく存おほやけの

わたくしをもつて今までたすけをき候(巻上廿五りみほ伊曾保か事

をそうもんの事)

おほやけのわたくし(毛吹草)

公のわたくし(せわ焼草)

公の私(譬喩尽)(諺苑)

(4) 今日人は人の上明日は我身の上

うみむしやうのならひけふハ人のうへあすハ我身のうへとしるへ

し(巻中卅二むまどろはの事)

けふは人のうへあすはわが身のうへ(毛吹草)

けふは人の上 明日は我身の上(せわ焼草)

ケフハ人ノウヘアスハ我身ノウヘ(諺苑)

天草本では「人は威勢の盛んなどて、他をば卑しめそ、栄ゆる者

忽ち衰ゆるは珍しからぬ世上の俗ひぢや」(馬と驢馬の事 下心)

と教えを説いているのがこのことわざに近い。

(C) 比喩的なことわざ

(1) 雪に霜

悪人には力をそゆる事雪に霜をそゆるかことし(巻中十五日輪とぬす人の事)

(2) 一夜白髪

た、いまのきつかり一夜はくつハつといひつへく候(卷中十八京出舎のねずみの事)

日葡辞書に「一夜白髪 この諺は、ある人が苦惱と心配のために一晚の中に頭髪が白くなったことから起つた。ひどい苦痛、心配辛勞に当面している人について言われる。」とある。

(3) 謹長じてはついに舞

あり申けるハ今とてもなとうたひ給ハぬそなたひちやうしてハつゝにまひとこそハうけたまハれ(卷下一ありとせみの事)

(4) 餓鬼の目に水の見えぬ

馬をさきにたて、主ハあとにあゆむ事ハかきの目に水のみえぬといふも此事にや(卷下卅人の心のさたまらぬ事)

餓鬼の目に水見えぬ(せわ焼草)

餓鬼ノ目ニ水見エズ(諺苑)

○天草本(伊曾保物語翻字_注)のことわざ

(A) 寓話のまとめとして、下心に出てくることわざ

(1) 少しの悪を懲さねば、大きな悪が世に蔓る(母と子の事 下心)

童が母に小さい盗みを折檻せられずに成人し、果てには大盗人になり成敗の場に引かるるに臨んで母親を恨んで斬られた寓話による。

(2) 鵜蚌の争

両方から争う物の中から出て取ることは多いものぢや、鵜蚌があひ争うて二つながら漁人の手に落つるといふもこれらのことを言ふか。(獅子王と、熊との事 下心)

熊と獅子が争っているとき狐が獲物を取って食べた話のまとめ。

(3) 理の昂ずるは非の一倍

理の昂ずるは非の一倍というて、道理を承引せぬ者は、必ず非分の害に遇はいて叶はぬものぢや。(馬と驢馬との事 下心)

驢馬と馬とに荷を負せて行つたとき、驢馬の荷が重過ぎて馬に佗言を言つたが承引せず、驢馬が倒れて死んでしまふ馬が結局荷物と驢馬の皮までしよい込んでしまつた寓話。

りの極したるはひの一倍(毛吹草)

理も強ずれば非の一倍(せわ焼草)

理の功仕たは非の一倍(警諭尽)

理ノコウジタハ非ノ一倍(諺苑)

(4) 土仏の水鬪り

いかに腹が立てばとて、力に叶はぬ相手に対うて仇を為さうと企つることは、土仏に水鬪りぢや(蝮と、小刀の事 下心)

蝮が小刀を食おうとしたとき、小刀が「千年万年食ふといふとも、汝が齒は皆滅つて、身は露ほど傷むまじいぞ」と言つた話による。

土仏の水遊び(警諭尽) 土仏ノ水遊(諺苑)

(5) 事を始めぬ前にその終りを見る

賢い人の俗ひには、先づ事を始めぬ前にその終りを見るものぢや(狐と、野牛の事 下心)

狐と野牛が井の中に入り思ふままに飲んだ後、出ようという段になり、狐が野牛に謀つて先にながし、「頭に智慧が有るならば、遠慮もなう井の中に入るまいぞ」と野牛をののしつて言つた寓話に出でくる。

(6) 恩を仇

恩を仇をもって報ずれば、天罰遁れずという儀ぢや(鹿と、蒲葡の事 下心)

狩人に追われた鹿が葡萄の蔓の中へ身を隠して辛い命を救われたのに、葡萄の葉を食べたために狩人に見つけられた寓話による。

恩を讎で返す奴（譬喩尽）
恩ヲ仇テカヘス（諺苑）

(B) 文中に用いられている教訓性の強いことわざ

(1) 舌三寸の哢り

それをなぜにと申すに、天下の善悪は舌三寸の哢るにあるといふことがござる。（イソポが生涯の物語略）

(2) 問答は無益

所詮問答は無益ぢや、何であらうともままよ、是非におのれをば我が夕食にせうする（狼と、羊の譬への事）

(3) 勝つも負くるもまた時の運

軍は勝負のことなれば、勝つも負くるもまた時の運に依ることぢや。（鳥と獣の事）

勝つも負くるも軍の習ひ時の運なり（譬喩尽）

(4) 喜びと悲しみは兄弟の如し

なぜに人々はお悲しみあるぞ？ 喜びと、悲しみは兄弟の如くぢや。（漁人の事）

(C) 比喩的に使われていることわざ

(1) 犯さぬ顔

右の二人の者どもが犯さぬ顔で申すは、「それをばイソポこそ盗んで食べてござれ、」（イソポが生涯の物語略）

(2) 舌は禍の門

舌はこれ禍の門なりと申す諺がござれば、これに過ぎた悪い物はござるまじい（イソポが生涯の物語略）

舌が禍の根（せわ焼草）（諺苑）

舌は禍之根 童子教（譬喩尽）

天草版金句集には「舌はこれ禍の根。心、舌は禍を招くものぢや」とある。

(3) けんもほろろ

少しも承引せいで、けんもほろろに言ひ放いて親類の許へ行って退けた。（イソポが生涯の物語略）

懸も法論ろにいふ（譬喩尽）

ケンモホロ、（諺苑）

(4) 水と魚

この難をお助けあらば、水と魚の如く親しみませう（鶴と、狼の事）

貴所と、某は水と魚の如くぢやによって、心を置かず申す、（蟹と、蛇の事）

うをとみず（毛吹草）魚ト水（諺苑）

魚と水との中じや（譬喩尽）

○「伊曾保物語」におけることわざについて

漢字平仮名交りの文語文体の国字本は、上中下三巻94話のうち、寓話数64話（中巻11、下巻34）あるがことわざは全部で23例をみる。そのうち文末にあることわざは「其ごとく」以下に15例が用いられており、ことわざを利用して、簡潔に寓話の要点をまとめて表現しているのが特色である。その他文中には8例用いられている。

口語文体でローマ字表記の天草本は、上下二巻で上巻半ばイソポが作り物語の抜き書以降70話の寓話があるがことわざは14例しかみ

あたらず国字本に比べて少ない。各寓話の巻末の一話 下心は手紙の形式をとって、寓話の意図するところを述べており、ことが6例出てくる。文中のことわざは8例で国字本と同じ数である。国字本と天草本で共通のことわざは4例であるが(仇を恩、貧血を含みて人に嘔はば先ずその口汚る、舌三寸のさえづり)国字本の方が簡潔に表現しており、天草本の方は文章がまわりくどく説教調である。

国字本でことわざになっているところを天草本では、下心で説教調になっているのが数例あり簡潔にことわざでまとめた方がよいと思われる。

注1 仮名草子集上 解説 日本古典全書 朝日新聞社

注2 文禄二年 伊曾保物語 京都大学国文学会 耶蘇会版

注3 伊曾保物語における位相の問題

金沢大学教育学部紀要 第25号

注4 古活字版 伊曾保物語 解題 勉誠社

注5 日本語の歴史4 平凡社

注6 国立国会図書館蔵 勉誠社文庫13

古活字十一行無刊記三卷三冊

注7 無刊記本 毛吹草「世話」 岩波文庫

注8 春風館本 諺苑 新生社

注9 たとへづくし 豊諭堂 同朋社

注10 天草版金句集の研究 吉田澄夫著 東洋文庫

注11 せわ焼草 米谷巖編 ゆまに書房

注12 文禄二年 伊曾保物語 京都大学国文学会 耶蘇会版

(県立金沢錦丘高校教諭)

受贈雑誌一覧その一

あをすがはら 第二十五号

字部国文研究 第十三号

愛媛国文研究 第三十二号

帯広大谷短期大学紀要 第十九号

大妻国文 第十三号

淑徳国文 第二十四号

岡大文論稿 第十号

大妻女子大学文学部紀要 第十四号

学大国文 第二十六号

学葉 第二十四号

金城学院大学論集 第九十四号

金城国文 第五十九号

研究紀要 第十九集

国語学研究 第二十二号

高知大國文 第十三号

京都教育大学国文学会誌 第十七号

研究紀要 第三十号

帝塚山短期大学日本文学会

字部短期大学国文学研究室

愛媛大学国語国文学会

帯広大谷短期大学

大妻女子大学国文学会

愛知淑徳短大国文学会

岡山大学法文学部国語国文学研究室

大妻女子大学

大阪教育大学国語国文研究室

金沢女子短期大学

金城学院大学

金城学院大学国文学会

光華女子大学

東北大学文学部国語学研究室

高知大学人文学部国語国文研究室

京都教育大学国文学会

四国女子大学